

籠の中のかぐや姫

神戸女学院大学非常勤講師 東野泰子 ひがしの やすこ

一 日本の昔話と子どもたち

娘の小学校の自然学校（林間学校）では、最終日に「スタンツ大会」が行われる。「スタンツ」とは即興で演じる寸劇やダンスのことらしく、決められたテーマのもとに各班が自由に題材を選び、工夫をこらした演技を競い合う。娘が参加した年のテーマは「おとぎ話」で、プレメンの音楽隊やシンデレラのほか、日本のおとぎ話としては桃太郎、浦島太郎、かぐや姫を題材に選ぶ班があつたらしい。おじいさんが空手で桃をかち割ると桃太郎が「イチ、ニ、サン、ダーツ」とアントニオ猪木のように飛び出したり、さびれたリゾートホテル「竜宮城」に行く乙姫様がたいそう横柄なもてなしをしてくれたり、というスタンツに皆で大笑いをしたという。優勝したのは「かぐや姫」チームで、おじいさんが大切にしている竹林を荒らす男どもを、竹の中から現れ

た少女「かぐヤンキー」が竹竿でバツバツとなぎ倒し、シユワツチと月に帰っていく話だったそうだ。最近の子どもは昔話を知らないというけれども、さすがに桃太郎、浦島太郎、かぐや姫の話はよく知っているのか、上手くアレンジをするものだと感心した。

このように子どもたちに親しまれている桃太郎、浦島太郎、かぐや姫は、いずれもそもそも古典作品である。桃太郎は起源があまり明らかになっていないが、江戸中期に赤本（子ども向けの草双紙）として出版されており、話自体はそれ以前から存在したといわれている。浦島太郎は丹後国風土記や万葉集巻九に、異界から戻った浦島子が箱をあけると老人になってしまふ話が見える。かぐや姫の場合、竹取の翁という人物は浦島子と同じく万葉集にその名が見えるが、「なよ竹のかぐや姫」があらわれるのは中学校国語教科書に採用されている『竹取物語』

二 『竹取物語』のかぐや姫

さて、よく知られているはずのかぐや姫ではあるが、子どもたちがもっているかぐや姫のイメージと『竹取物語』におけるそれとは、当然のことながら、いくぶん違ったところがある。

かぐや姫というと、多くの人は、真つ二つに切られた竹の筒の中に、赤ちゃんほどの大きさのかぐや姫がすわっている絵柄を思い浮かべるのではないだろうか。現代の子どもたちが目にする絵本でもよく採用されている絵柄である。私自身も子どもころにこの絵柄を見て、「翁はかぐや姫を傷つけずに、うまく真つ二つに切ったものだなあ」と思っていた。しかし、『竹取物語』原典ではかぐや姫は赤ちゃんほどの大きさではない。また、日本に普通に生息している竹は、赤ちゃ

んが入るほど太くはなく、『竹取物語』の竹もそれほど太い竹だとは考えられない。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてみたり。翁いふやう、「我朝ごとタごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり」とて手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の姫にあづけてやしなはず。うつくしきことかぎりなし。いとをさなければ、籠にいれてやしなふ。

「三寸」というのは、「三」が切りの良い数字であるためにそういうのであって、厳密に九センチというわけでもなく、だいたい大きさをいったものだろう。「手にうち入れて」とあることから考えても、かぐや姫は大人の親指ほどの大きさで、人間の赤ちゃんとはかけはなれたものである。

原典の「いとをさなければ、籠にいれ

てやしなふ」というのは、「とても小さいので、籠に入れて育てる」ということである。また、原典冒頭に「野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり」とあるように、竹取の翁は竹を採つて「よろづのことに使ふ」、つまり竹細工で籠などを作っていたのだろう。翁はみずから竹で作った鳥籠か虫籠ほどの大きさの籠にかぐや姫を入れて育てたのである。

三 ファンタスティックな古典へのいざない

絵本にみられる「竹筒の中の赤ちゃん」のようなかぐや姫と、「籠の中に入れられた小鳥」のようなかぐや姫とは、子どもたちが受けるイメージはずいぶん違う。人間になることが予想される赤ちゃんではなく、妖精や親指姫のようなファンタスティックな存在が『竹取物語』のかぐや姫なのである。

さらに原典には、「三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、

髪あげなどとかくして」とあり、手のひらに乗るほどの小さなかぐや姫は三か月ばかりで成人してしまふ。また、彼女を後宮に迎えようと訪れた帝に袖をとらえられたかぐや姫は「きと影になりぬ」、つまり、急に影のようになって姿が見えなくなってしまう。

紫式部は『源氏物語』において『竹取物語』に「物語の祖」という評価を与えている。帝の求愛を断り、恩のある竹取の翁と姫を置いて昇天しなければならぬいかぐや姫の姿には、人間としての悲しみがあり、そこが「物語の祖」と評価される所以であろう。しかし、栄華の極みである入内を断り昇天するという、当時の女性としてはあり得ない選択をするこゝとができるのは、かぐや姫が人間ならざるファンタスティックな存在だからである。おとぎ話の世界から、人間の物語の世界へ足を踏み入れてゆく子どもたちにも、まずは、かぐや姫のファンタスティックな側面に興味をもってもらおうのもよいだろう。

東野泰子

大阪府生まれ。論文に『奥義抄』から『僻案抄』へ「そが菊」注にみる院政期歌学の一様相（『国語国文』）など。共著書に『八雲御抄の研究』正義部 作法部（片桐洋一編和泉書院）、『宴曲索引』伊藤正義監修、和泉書院 などがある。